木曽地方の温帯性針葉樹林の保護･復元に向けた取組第2回検討委員会概要

開催日時及び場所	平成25年12月3日（火） 13:00～　中部森林管理局大会議室
検討委員	青山　節児　（中津川市長） 飯尾　歩　　（中日新聞社　論説委員） 池田　聡寿　（池田木材（株）　代表取締役社長） 植木　達人　（信州大学　教授） 大住　克博　（（独）森林総合研究所関西支所　主任研究員） 志水　弘樹　（志水木材産業（株）代表取締役） 田上　正男　（上松町長） 野村　弘　　（木曽官材市売協同組合　理事長） 早川　正人　（付知町づくり協議会　会長） 山本　進一　（名古屋大学　名誉教授） 山本　博一　（東京大学大学院　教授） 湯本　貴和　（京都大学霊長類研究所　教授） 横山　隆一　（（公財）日本自然保護協会　常勤理事） 検討委員13名 うち植木委員は欠席
議事内容	（1）保護･復元の区域、ゾーニングについて （2）保護･復元についての考え方等 （3）その他
概　　要	○　保護･復元に向けて取組む区域、ゾーニング、ゾーニング毎の取扱方針について大筋での了承が得られた。個別案件については、更に、事務局で各委員から意見を聴取することとなった。 ○　委員からの主な意見は次のとおり ・人工林の天然化とは、人工林の種を落として天然化していくのか。人工林そのものを天然化していくのか明確にしていく必要があるのではないか。 ・検討委員は、各界から集まりそれぞれの立場からの意見があるので、1項目毎確認しながら進めて行かなければ前に進まないと考える。 ・核心地域（コア）は、赤沢･出ノ小路など保護林が設定されている箇所を中心としてして林班単位くらいで徐々に広げていくのが良いのではないか。現況が生産地となっている個所をいきなりコアにするのは広すぎるのではないか。 ・流域での管理と尽山（はげ山）とならない予防的に管理をすることを考えると、この程度の区域は必要と考える。 ・人工林は長伐期化し、200年超の人工林を作って欲しい。 ・木曽の木材生産は、必ずしも安定的に行われてきていない。資源状況によって増減を繰り返しており、将来の持続性を考えるとこの取組が必要である。 ・伊勢神宮の式年遷宮御用材の要望があり、これを供給する場所がコアにしか無いとなった場合の扱いを考える必要があるのではないか。 ・北沢がコアになっているが、ここから材が出てこなくなると伝統建築物の修復等に支障が出る懸念がある。 ・木材･木工業は、地域の基幹産業であり、今回の取組でこれらの木材供給･技術の継承に影響が出ないよう配慮してほしい。 ・赤沢自然休養林の奥千本は、200年後にはヒバの森に変わるのではないかと危惧している。ヒバの除去等の人の手がかけられるようにしてほしい。 ・赤沢自然休養林は、誰でも来られる場所として今後も利用していけるようにしてほしい。 ・誰が中心となってこの取組を行うのか。森林管理局がこの取組を担っていくとしても、地域や大学、研究機関等との枠組みを考えていく必要がある。 ・今回の取組内容は、現行の保護林制度にはないものであり、伝統産業等と密接な関係があることから、新たな保護林制度を作っていく方がよいのではないか。 ・管理委員会の設置は、新たな取組だと思う。モニタリングのチェックを行う管理だけにとどまらず、研究的な要素を持たせてはどうか。